HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文化スポーツロッククライミング
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	校友会雑誌, 1
Issue Date	1925-11-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77703
Type	article
File Information	A010_01p2-6.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP



雷鳥

創刊號

岐阜高等農林學校山岳部

雷鳥

創刊號

険難の登攀
それは虚榮か非ず野心か非ず
たゞ無限の前に眞實の命を盡さんとする努力これのみである
生くるものは死の約束の下に在る
死期は神の御手にある
登高
然うだ生くる間の努力である

「山行」より

岐阜高等農林學校山岳部

裝幀圖案　小里運一

内容

一、扉（山行の一節）

一、春の德本峠（寫眞）　鈴木精一郎

一、卷頭のことば（裏面「古人の見たる雷鳥」山岳の一節）

一、文化●スポーツ●ロッククライミング　講師　鈴木榮太郎　一

一、登山に就て　槇有恒　七

一、山岳の植物　理學博士　武田久吉　一五

一、スキー術の分野に就て　六鹿一彦　二〇

一、山の昆蟲を述べ登山者に希望す　名和梅吉　二八

一、春の飛驒より信濃路へ　X Y Z　三三

一、室堂より劍へ　鄕浩　四二

一、現ローマ法王と登山（譯）　大橋衞　四四

一、國有林の高山植物保護に就て　大阪營林局　五三

一、登山者之心得　東京營林局　五六

一、南アルプスに於ける物價表　五九

一、新設小屋及新コース　六一

一、部報

寄贈物品及圖書

動靜

編輯後記

巻頭のことば

初夏の翠綠滴らんとする山——
嚴冬の白皚々たる山——
山は永遠の神秘を胸深くしのばせ
沈默の眼を以て下界を睨視してゐる

いみじくも尊い山に接した時に私等は
崇嚴の前に自己の醜さをもかへりみず
ひたすらに幽遠の殿堂に分け入らふとする

自然の妙鑿に憧憬れる私等の「雷鳥」は
若人の追究の絶えざる歩みである

古人の見たる雷鳥

左記の一文は今より百九十年前乃ち元文元年の木曾駒登山記の一節です。雷鳥の觀察が却て現代人の尋常視して看過する細點まで仔細に記載してあります。

一、山八分目位より嶺迄の石色すべて焼石の如く雪にさらされ白く砂も同樣なり。石は當所の御影石の如し苔付き候やうなる滑なる石にては無御座、如何にも地肌荒く大方岩茸付き申候。又た岩鳥は雉の雌の如き鳥にて所々岩の上に二三羽、五七羽づゝ一所に寄居り申候。遠くより見候へば鳥のなり鶉の如く四五間にてさくと見候へば、首長く毛生色の樣子尾の形鳴く聲までも其儘雉の雌に似て鳴くさま雉より少しせはしく相聞え候。脇下尾下共に潭白く足は指際まで毛生え足は黄色にて少し赤味あり鳥形平み有之、眞鴨の形にも似申候。雉の雌より少し大振にて足に水掻有之やうに見え候へ共是は見分け難く聊か追立て候ても舞ひ申さず側へ寄り候へば岩を傳ひ退き申候。岩間へ追込み候へば遁げ申さずすくみ居り候故捕へ候はゞ取得易く相見え申候。尤も何れも同樣の鳥故雌雄相知れ申さず候。此鳥も山七八分目位より峰迄の間に岩にのみ相見え候。駒形山の鳥別して澤山に相見え申候。

――（山岳第五年第一號より）――

文化・スポーツ・ロックライミング

講師　鈴木榮太郎

スポーツが如し爭鬪的本能の滿足の爲に生じ、且つ現在もさうであり將來もさうである可きであるとしたならば、私はかくの如き意味のスポーツは、如し人々が皆自由に平等に平和に文化の華を飽かず眺める樣な時代に達したならば、私等の文化の世界から當然其影を消してしまふであらふと思ふ。否消にてしまう可きであると信ずる。何となれば私等は私等の世界が完全なものになる迄は爭鬪を續けなければならぬとしても、爭鬪其物には何らの文化價値も存しないからである。何か高い文化價値の戰ひは致し方ないとしても單なる爭鬪的本能の滿足の爲の戰ひは私等の文化の世界に於ける毒蛇である。故に如し單なる爭鬪的興味の爲に存在するスポーツがあるとしたならば私はかくの如きスポーツは一日も早く此文化の圈内から去つてもらいたいと思ふ。

私は今日の子供等が以前の樣に兵隊ごつこをしないのを見る時、次の世界が一段と明るみに拓けて行くことが暗示されて居る樣な心持がして廣い人類愛の立場から深い喜悅を覺ゑるのである。私等は出來る丈子供等の頭に爭鬪に緣のあるものを教へない樣にしたいと思ふ。無垢の頭に自から敵愾心をそゝる樣な國民的歷史や、其と同じ樣な色彩の强い物語りなどは出來る丈け避く可きではないかと思ふ。然し例へば本質上國民的歷史の體裁をとつてゐた從來の歷史に就て云ふならば、今日迄我々は或る一つの國としてゞはなく敵とか味方である處の國として先づ或る國を子供等に教へようとして來た。そんなにして教へられた子供等が其國をほんとに正しく識る事が出來ないのも愛する事が出來ないのも當然である。

彼等は先づ敵國として次に或る一國として教へられて居るからである。總ての人を人として、總ての國を只國として、先づ彼等に教へる時にして始めて私等は子供等の教育者としての、又次の時代の母体としての我々の文化的使命は果されるのでないかと思ふ。

我々と雖も現在が必要なる爭闘に充ちた時代である事は認むるけれども、其と同時に爭闘の爲の爭闘のむごたらしさと、執拗さも飽く程認むる事が出來るのである。而して其が我々に根深く喰ひ入つて居る爭闘的本能の滿足の爲である事も認むる事が出來るのである。戰ひの爲の戰ひは大きくは國際間にも少さくは我々の日々のさゝやかの生の營みの間にも絶えず現はれて居る。

けれども古代人を研究した人の話によれば私等の爭闘的本能は、元爭闘の事實が生んだのである。されば我等は爭闘の事實なき、故に又爭闘本能を知らざりし頃の私等の平和な祖先の社會を想ふ事が出來るのである。社會の從來の歩みを回顧してみると事實はやがて規範となり、規範はやがて本能となる事を教へて居る樣である。

今の世に爭闘と爭闘本能の存在は事實である。然し私等が何か高い文化價値の爲に爭ふのであつたらまだしも、戰はんが爲に戰ふ事によつて此地上を血と涙でよごして居る事を省みると、呪はれた人間の運命があまりにたへがたく思はれる。私等が素直に人間の世界を愛し其文化の健かなる成長を翼ふ時、私等は色々の爭闘的興味の爲の爭闘の形式を早く葬りたい心で一ぱいになる。然し長い歷史の道程や色々複雜した社會の仕組を考へると、我々が一朝にして爭闘的本能と其爲の爭闘の事實を驅逐する事は勿論出來ぬ。然らば人間の世界は此點に關して永久に呪はれて居るであらふか。私は本能は刺戟によつて發達するものであると云ふ事を聞いてゐる。如し此の原則にして正しければ他にあるとしても、こゝにも一縷の光を認め得ないだらふか。兎に角私等は此光も追つて行きたい。こゝでは刺戟を與へる事を成る可く避ける事が第一の仕事でなくてはならぬ。然らば私等は私等が廣い意味の教育者として次の時代

或は次の次の時代の人々に文化財をゆずり渡す時、一つでも少く爭闘の事實と彼等の爭闘的本能を刺戟する機會とを知らしめない樣にしてはどうであらうか。然しやがて彼等が余りに多いかくの如き事實の渦中に飛込んだ時には、彼等と雖も認めまいとしても認めざるを得なくなるであらふ。けれども一つでも少く知らしめたいのである。一つでも刺戟する機會を與へたくないのである。もとより其は九牛の一毛を抜き取る事に等しい。其は解つて居る。けれども其の一本々々の毛を抜きとつて行くならば何時かは九牛は眞裸体となるのではないか。今日迄の人類の歩みが長かつた如くに、これからの長い我々の精進の理想の歩みも長いに相違あるまい。九牛が裸体になる日を信じて居る我々は兎に角歩み續けて行きたいのである。

然らば一つの戰としてのスポーツを文化價値的立場から排斥す可きは勿論である。然しスポーツは爭闘的本能を滿足せしむる以外何の存在理由も有してゐないであらふか。換言すればスポーツより爭闘の要素を除けばあとには何も殘らないであらふか。或る人は其殘るものとして否、根本的存在理由としてよつてスポーツとなり、藝術的興味が加はる事によつて遊戲となるとも云ひ得るかも知れぬ。さうすれば体操も遊戲もつまり体育の爲と云ふ功利的目的の手段である。事實スポーツが今日社會の体育の爲と云ふかも知れぬ。そして純粹の体育の形式として体操があり、之に爭闘的興味が加はる事に色々の意味での指導者達が表面の理由として述べて居るスポーツ、併びに体操の目的は之である。

然し實際にスポーツをやる人達は表面の理由は右の如きものであるかも知れぬが、面白いからやつてゐると答へる樣である。面白くなければ誰も体育の爲になるとは知りながらもやる人はあまりないであらふ。少くとも殆ど命懸けにやる人はないであらふ。其は明白な矛盾であるから。然し爭闘的分子を含まない体操に人が余り興味を感じない所を見ると、彼等が面白いと云ふ處と爭闘的意味には必然的關係が存する事が直ちにうなずかれる。其は思ふに先に云つた如くに人は今日爭闘本能を有して居る。本能は其

を満足せしむる事によつて愉快を感ずる。然らば彼等が面白いと云ふのは又彼等がスポーツをやる實質的理由は此爭鬪的本能を滿足せしむるからであるに違いない。然し只其丈であらうか。私は此疑問を起す時に直ちに思ひあたるのは例のロッククライミングである。無人の境にある千丈の斷崖に文字通り命がけで一寸のすきもない緊張の中に息を殺して這い登る人達に爭鬪の分子が含まれて居るであらふか。然し或る人は其は他の登山家と競爭する滿足を得んが爲と云ふかも知れぬ。然しさう云へるなら自分の血液で繪を描いた畫家も他の畫家と競爭せんが爲であつたと云はなければならぬ。かくの如き感情も伴つて居るかも知れぬ、否伴ふ事は充分あり得ると思ふ。けれども其が伴はぬ場合も考へ得るではないか。世の一般畫家は純粹にそんな感情を伴はないでは描いて居ないかも知れぬ。けれども私等は描かんが爲に描いた崇高な藝術家達もあつた事を屢々聞くのである。他の目的の爲の手段として描くにあらず其自身の目的の爲に彼等は描いたのである。俗名を博せんが爲に非ず他と競爭せんが爲にも非ず、其他如何なるものゝ爲にもあらず描く事自身が目的であつたのである。自分自身では滿足であつたらうが、少くとも客觀的には不幸に此世の陰で生れて陰でなくなつた偉大なる思想家や藝術家達にこんな種類の人達が澤山あつたのではないかと私は時々想つて見る事がある。

私等は之と同じ樣な事をロッククライミングに就ても云へないであらうか。只登りたいが爲に登る人然かも命がけで。私は多くの登山家が有してゐる一種の超俗的品格に接する時ぞうしてもさう思ひたいのである。繪を描く事が其自身畫家の目的である可きと同樣に岩登りする事其自身が登山家の目的である。畫家が一本の繪筆の先に生命の鼓動を波うたして居ると同樣に、登山家は一筋のロープに生命の鼓動を波うたして居る。

かくて私等は從來の藝術が本質的に爭鬪と無關係に其自身存在理由を有して居たと同樣に、スポーツも少くともロッククライミングは矢張り其自身の存在理由を持つてゐる樣に思ふ。

然しながら右の如き意味のロッククライミングは一種の藝術であり創造的生命其物の姿である。然らばかくの如きものはスポーツの一種としては余りに高度のものゝ樣に聞えるかも知れぬ。けれども其をスポーツの一種と見ないとするならば、私は矢張り爭鬪其者と殆ど區別しがたい原始的なスポーツをスポーツとして見る事も出來ないのであらうと思ふ。

スポーツは實に其が爭鬪的要素を漸次脫化して行く色々の階段を有し、最低度に於ては其は殆ど爭鬪其者であり、最高度に於ては其は創造的生命の表現其者である。然らば私はスポーツの概念を如何に決定す可きであらうか。

スポーツが如何にして社會に芽ばえ又如何なる史的發達を辿つて來たか其は當面の問題ではない。只文化的理想の見地から純粹に形式的に之を見て私はスポーツの三つの形式を考へる事が出來る。

(一)結果も過程も爭鬪的なるもの
(二)結果に於てのみ爭鬪的なるもの
(三)全然爭鬪的ならざるもの

(一)は爭鬪其者の全然模寫である。戰爭や喧嘩に見る卑しむ可き感情は全部此の形式のスポーツに於て現はれてゐる。狡智と强力が讃美される。優越と云ふ事が目的である。

(二)は結果に於て即ちレコードに於て爭ふ形式であつて其處では只實力が支配するばかりである。けれども結果に於て矢張り爭ふのであるから優越感は充分に漲り、純粹に爭鬪より脫化し切つてゐない。蓋し優越的欲望は或る意味に於ては爭鬪の欲望自身とも云い得るであらうからである。ゴルフは此部に屬する優れたものゝ一つであらう。

(三)は純粹に爭鬪より脫化した形式で過程に於ても結果に於ても寸毫の爭鬪的要素はない。優越と云ふ樣な意味で問題とされる事があるとするも、如しさうされた場合には別の意味から見られて居るので

ある。一枚の繪書も之を藝術的と見る事も得可く、競爭の成績とも見る事も出來るし、又商品と見る事さえも出來る。何と見るも謬りではないが、競爭の成績と見る場合も藝術の爭ひであり、商品と見る場合も藝術的に何等かの價値あるが故に商品となるのであるから其は本質的には藝術品と云ふ可きであらう。第三形式のスポーツに關しても同樣の事が云れる。

私の云ふスポーツが如何なるものであるか大体分つたと思ふが。私は右の三つの形式の中第三の形式を以てスポーツの理想としたい。其の何故であるかは既に私が社會と文化にどんな希望を持つてゐるかを述べた處と併せ考へれば直ちに解る事であると思ふ。

私はかく爭鬪の要素より全然脫化された形式をスポーツの理想的形式と見るのであるが、從來或ひは一般にスポーツの目的とされた所の体育とか心身鍛練とか云ふ事は矢張り必要である。然し其が如何なる形式に於て行はれるとしても吾人は矢張り其からも爭鬪的要素は剝奪しなければならぬ。そして寫眞と肖像畫が異るやうに、それとスポーツとは嚴に區別しなければならぬ。そしてスポーツを其自身の領域を有する文化の一つの華であらしめたい。

かくの如き意味のスポーツなら、其は人文の續く限り無くなる時はないであらう。否其は我等のユトーピアを飾る可き一つの花である。

—(一四、一一、二〇)—